夜回り
山田先生
西陵商ラグビー部元監督

▶18◀

「天国からの応援」に応え準決勝に快勝

▼山田耕二（やまだ・こうじ）　名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商（現西陵）監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県弥富市で老人ホームの理事長を務める。

友人の死乗り越え初の「花園」決勝へ

大会中に生徒の友人が事故で亡くなった。長い教師生活の中でも初めてだった。彼らにどう言葉をかけてやればいいか、分からなかった。それでも、なんとかして生徒たちに前を向かせなければならない。考えを巡らせ、口を開いた。

「勝ち進むことが、亡くなった彼への一番の供養になるんじゃないか。泣きながら名古屋に帰るのは申し訳ない。最後まで勝ち進んで、ご霊前にいい報告ができるように頑張ろう」。言葉を選び、搾り出した。

生徒たちも何とか気持ちを整理し、次第に落ち着きを取り戻してくれた。2日後の準決勝。今度は通称「西の横綱」、またしても優勝候補の大阪・大工大高（現常翔学園高）が相手だった。天国で見守ってくれる味方の応援に応えよう、と生徒たちは必死に食らいついた。66－29で快勝し、初の決勝進出をつかみ取った。

迎えた1997年1月7日。決勝当日、私はとても穏やかな気持ちだった。出場チーム中最も体格が小さく、「軽量商」と冷やかされた。そんなチームが優勝候補を次々と倒し、決勝に進んだ。それだけで十分に快挙だ。勝っても負けても、彼らを最大限に褒めたたえよう、と決めていた。

生徒たちは違った。その目には、優勝しか見えていなかった。試合前、ロッカールームでのミーティング。主将の原田陽一郎が、前年の準々決勝で日川高に1点差で敗れたことに触れ、こう宣言した。

「俺たちは去年、この花園に1点の忘れ物をした。きょうはそれを取り返しにいく。相手より1点でも多く取って、絶対勝つんだ」

彼らは闘志をめらめらと燃やし、むき出しにしてグラウンドに向かった。ホイッスルが鳴り響き、試合は始まった。

夜回り
山田先生
西陵商ラグビー部元監督

▶19◀

実った努力 控えの小川が最後の最後に大仕事

▼山田耕二（やまだ・こうじ）　名古屋市中区生まれの73歳。元ラグビー日本代表。西陵商（現西陵）監督として1997年、全国高校大会で愛知県勢初優勝に導く。豊田自動織機総監督を経て、現在は愛知県弥富市で老人ホームの理事長を務める。

逆転また逆転…入れ替わり7度の大激戦

レフェリーのホイッスルが鳴り響き、いよいよ決勝が幕を開けた。相手は大阪・啓光学園（現常翔啓光学園）。優勝経験もある強豪だ。西陵商では始業式を早朝に簡単に済ませ、バス17台で教職員、生徒、保護者ら700人の大応援団が名古屋から駆けつけてくれた。私はスタンドから一緒に試合を見守った。

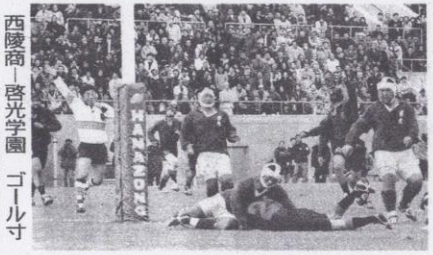
開始1分、いきなり啓光学園に先制トライを取られた。追いついては追い越されを繰り返し、リードするチームが7度も入れ替わるという、高校ラグビー史に残る激戦を繰り広げた。

後半30分が過ぎ、ロスタイムに入ってスコアは9－25。次のワンプレーで試合終了だ。

敵陣ゴールポストの目の前で密集戦のモールが組まれる大チャンス。スタンドの大応援団は逆転を信じ、総立ちになっていた。

モールからボールを拾い上げたスクラムハーフの後藤和彦は、交代出場したばかりの背番号21、ウイングの小川恵にパス。相手タックルをひらりとかわした小川が、ゴールポストの真横に飛び込みトライ。24－25と1点差に迫った。ゴールが決まれば逆転だ。スタンドは優勝が決まったかのような熱気に包まれた。

小川は、花園でプレーするのはこの日が初めてだった。控えではあったが、本当に真面目にこつこつと頑張る選手だった。全体練習を終えた後の自主練習でも、いつも最後まで残っていた。なかなかレギュラー入りできずに悩んでいたが、最後の最後に、大舞台で努力が実った。チームを優勝に導く大仕事をやってくれた。



西陵商－啓光学園　ゴール寸前のラックから西陵商の小川（中央下）がゴールポスト左へトライ。この後ゴールキックも決まり1点差で逆転優勝する＝1997年1月7日、花園ラグビー場で